

# 書道とあの歌

関東支部 五味 宏

## [\(前回 2020 年 11 月号への寄稿\)](#)

「書道とふるさと」と題して寄稿しました茨城県の紹介は、約60年前の1964年に開催された東京五輪大会が行われた前後に、故郷の地が「筑波研究学園都市」と称し、計画され、その後数十年を経て「つくば市」が創生されました内容でした。

現実の事として慣れ親しんだ地の過去と現在が、特に日本百名山の一つとなりました筑波山の今昔を織り込んで小生の「書道」に因んだ事とともに寄稿させて頂きました。

## (今回の寄稿)

更に当媒体(HP)をお借りしての事ですが、もう少し過去と現在の立ち位置の様子を、所謂、歴史の散歩を交えて、お伝え出来ればとの思いになり、貴重な頁を拝借する事にしました。今回は我が故郷の歴史、文化および経済を紐解き、かつての会社と自己の生活の関連について、ほんの僅かな事柄としてお知らせしたいとの思いです。かつての研修所(相模原、日野)が、1994年に茨城県石岡市に移転して建設された事の周辺の事を取り上げてみます。当寄稿文は現在迄の持てる知識に加えて、新しくなった事実を出来るだけ追求する事にこだわっての内容とする事を念頭に置きました。

## (余談: 恩師の事)

余談ですが、恩師の事を少し述べたいと思います。歴史が専門で地域の歴史書編纂の一員として「[茨城県の歴史散歩](#)」(山川出版社)の作成に加わっていました(因みに、当書は現在2006年で途切れています)。当地の歴史について現場主義というか現地を訪れて、土地土地の事実に沿って纏め上げているような話でした。1985年頃に歴史編纂の作成にも係わり、国分寺が建立された石岡市の「市史」編纂の執筆に加わった事を聞かされました。約5センチの厚さの書籍の一助と成った事を聴かされました。その際、当一冊を前述の「歴史散歩」とともに頂戴しました。風光明媚な気候風土で、稲作には良い土地柄である旨の内容が第一のポイントです。

1970年代頃からの高度経済成長期として多くの産業が隆盛した時代を思えば、結果の良し悪しを一つ一つ噛み締めて、今の世のグローバル化の世界と比べつつ、危機の時代の「時給自足」は、世界との調和を考慮しながら確固たる事にする機会であるようです。礎になって欲しいとの客観的な視点です。

石岡研修センターが建設され、幾度か訪れて当施設が大いに知識を習得、醸成する場になったと今更ながらの思いです。

多少の年代の相違が有っても、同時代に同一企業に同席し地方地方で立場立場に置ける一日一日、そして遠い将来を見据えたかも知れない業務を通して、当業界の一員として世の価値観を多かれ少なかれ共有、共感していると思ひ込み、過ごしている毎日となっています。

その立場から少し目を転じ、あらためて度々に遭遇した出来事を、今ある確かな足跡として時代の幅を狭めそして広げたら、同じ境遇にしながら、更に違う世界の方々の様々な思いを知る事となるのではとの思いになります。

### (地球は「小さな星」)

日本における世界の中の身近な生活が、地球は「小さな星」なのではと驚きました。最初の赴任先の先輩が社内旅行の宴席において、当時はカラオケも無く一曲を披露されました。その歌は幸せ一杯夢一杯の「恋しているんだもん」です。その方は商船大学出身で船長の資格を持って入社された事を聞かされています。

その小さな星の大きな波に乗り、その立ち位置から見えてくる事があると思う一幕は、その数年後の催しです。その方が推薦されたのでしょう。横浜港から、小さな日本を船上から観るイベントは、七色のテープと銅鑼の音とともに同僚の二名と旅立ち、約十日間でしたが、客船に乗船し社外研修として、東南アジアの二か国を周遊する旅でした。その一つは香港(当時は英国領)でした。

そして、一つ一つの出来事については、既にその時の報告に表現しています。しかし、この小さな星の日本人達が地球に向き合い、それら小さな存在が当イベントの一端において、かつて戦艦で大海原へと向かう思いを知る旅の一端にしては、あの海の広さと大きな波、海の色と深さを知る機会になり得た事が最大の収穫だったのです。

## （過去の事、今の事）

とかく年齢を重ねますと過去の事に多くのこだわりを持ち、新たな事実を知らずいたり、更に肯定せずに老いと思われてしまうとの話を聞いたりします。偉い学者の方々が、その辺りの年代の意見の相違の話について知識を披露されます。過去の話を繰り返すのは老いた事になるとの話はどうなのでしょう。この先の研究に委ねたいと思います。老いと思われなためには、現在の出来事との調和を交えて、兎も角も話を今の事へと先に進める事が得策でしょうとの思いです。

## （ホームページの他支部活動への興味）

話を元に戻します。茨城県は関東平野の東の一角に位置しています。今回、伝えたい内容は地方の特色についてでもあります。各地方の有り様を見聞きますと、生活の基盤は、日本でも大きな違いが有ることは、各地方の歴史、文化の日帰りの旅のお知らせを当HPで拝見しますと羨ましくなったりします。

## （明治から現代）

話は明治時代に遡ります。「富国強兵」を掲げて150年前に明治維新として国策を推進していった時代の事です。「汽笛一斉新橋を・・・」の唱歌は、その後の世に文明開化の夜明けを伝えた一曲であり、鉄道の発展が大きく影響して、敷設の歴史とともに輸送方法の変化、時々時代の経済発展の大きな要素となり、次の産業を形取る一

歩を担っていると、ある意味で歴史の所産と思うのは小生だけでしょうか。

ある時期、福島県南部の常磐炭鉱が燃料確保の一手段として石炭採掘および需要の源として発展していきます。そして、需要先の京浜地域へ石炭を輸送する手段として鉄道が敷設され、今日のJR常磐線の発展へと繋がりました。明治維新から約30年の鉄道の歴史を紐解くだけで、当地だけではなく欧州の技術を習得して文明開化をやり遂げていった事が、江戸幕府約260年の封建社会を欧州の文化に即応させて、新しい近代社会国家を築いていく事になったのでしょう。

国家計画と実行との結果の所産は、偶然の出来事としてあったとの思いになります。明治時代以降の歴史を振り返れば日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、もう繰り返してはならないと誓った第二次世界大戦とその前後に起きた経済の発展は、悲劇を繰り返さないためにも、事実として戦争の悲劇が如何に愚かな事かを後世に伝えて行く事が重要だといわれています。戦争を知らない世代は何を成すのかが問われます。その方法は先輩が一例として揚げていて、像に託して、その思いを形として後世に伝える事のようにもあります。

## （江戸時代）

話を少し江戸時代にも遡ります。県庁所在地の水戸市はそもそも戦国の時代を治め、江戸時代を創始して封建社会の礎を築いた徳川家康が、関東の要所として徳川御三家(尾張、紀州、水戸)の一つとして、水戸徳川家が水戸城を拠点に常陸の國を

所領地として誕生しました。二代目「水戸黄門」の徳川光圀は「諸国漫遊」および「大日本歴史編纂」で、今はお茶の間テレビで、人気の一部を博しながらでしょうか天下諸国の悪政を正して、僅か一時間の中に、昔ながら「悪が栄えた事は無い」ことを伝授しているようにも思えます。更に、昨年放映されました大河ドラマの「晴天を衝く」の渋沢栄一氏の江戸から明治時代の活躍の多くの足跡について、今に伝える歴史の場に登場する江戸幕府の最後の将軍(十五代)の一橋家徳川慶喜公の出身が、前述の水戸徳川家の後世となります。

当市の一角に有ります [偕楽園](#)は、[日本三名園\(金沢市の兼六園、岡山市の後楽園、水戸市の偕楽園\)](#)の一つとして雪月花として世に広められ、当園は春の訪れとともに、紅梅白梅の百種約三千株の花々はその香りとともに人々を楽しませてくれます。

## (つくば市の周辺)

ここでの的を少し絞りまして、前回に紹介のふるさと「つくば市」の周辺の話になります。当地は小さな山城、平城が幾つかその歴史の痕跡を残しています。遠く昔に平安遷都のあった西暦890年頃から始まる平安京の時代に、国分寺が現在の石岡市に設置された事で「常陸風土記」とともに西の都の文化が伝承していく発端になりました。935年に当地の豪族が租庸調の年貢を納める制度の崩れから騎馬を飼う事で武士として、当地で勢力を伸ばしてきた豪族の平将門が「将門の乱」を起こして、中世の武士の誕生ということになります。経済の基盤を変革して農耕の暮らしから作物を流通させて、

日々の生活の豊かさを発展させていく知識を得て、大いなる夢と希望を「大志」として、当時の血気盛んな若者たちが、時にその長に意見を述べ、その場の生活の安定を築こうとしたと歴史は語っています。

## （書道とあの歌）

不思議なフレーズは「歌は世に連れ、世は歌に連れ・・・」です。当HPで拝見する「♪」は何を意味するのかを少し考えました。昔話で恐縮しますが、カラオケが隆盛の際に「一億総タレント」と言われた時代がありました。マイクを片手に時々のソングを思い思いにタレント気取りで声を囁らしたことを恥ずかしながら思い出します。

例えば、当HPの何かの一文を見掛けると関連しますソングがメロディーとして、口から出て来たり歌詞を探したりするのは、小生だけでなく、当業務に携わる方々はその表現から、それ以上のことであろうと思う次第です。

懐かしの思い出の歌を創作の書にしてみました。当時、図工の時間に城山に登り、写生をする学習が有りました。絵が得意の同級生は山頂付近からの町並みを几帳面に描写していた事を横目で見ていたことを思い出します。当方の「書」はその当時から少し経って流行した懐かしの歌です。恒例になりました茨城県つくば美術館における年初めの展覧会が昨年は中止となりました。本年は注意しながら一月の最終の週に開催されました。

添付：作品「流れる雲よ……」



最後になりますが、当地への足は何時の間にか建設されて浅草駅とつくば駅を繋ぐ「つくばエクスプレス線」、常磐自動車道も約3年前に圏央道との連結があり、成田(国際線の玄関口、成田山新勝寺)から東北自動車道の久喜・藤岡インターチェンジへと繋がりました。重要な経済・文化発展の架け橋となっています。

偶々、節分は過ぎてしまいましたが、「鬼は外、福は内」と、豊穡の豆で厄払いをします。早々に厄払いが叶い、平穏な世が来る事を祈念します。残念ながら、この時期に当地のお酒と自慢の品は供せず早々と会場を後にしました。

(2022年3月15日)